

【予稿集】

離島における読書環境整備の事例的検討

—北海道礼文町の取り組みを中心に—

野口武悟*

*専修大学文学部

*takenori@senshu-u.ac.jp

離島の読書環境については先行研究が少ない。本発表では、離島の読書環境整備の事例として、北海道礼文町の「BOOK 愛ランドれぶん」を取り上げ、開設の経緯、運営の実態、特色、課題などを明らかにした。「BOOK 愛ランドれぶん」は、公営書店の最古参であり、書店と図書施設の一体運営の嚆矢ともいえる。開設から 27 年経過し、離島における読書環境整備の成功事例の 1 つであることは間違いないだろう。

A Case Study on Maintenance of Reading Environment in the Island : Focus on Rebun Town, Hokkaido Prefecture

Takenori NOGUCHI*

*School of Letters, Senshu University

1. 背景と目的

日本の読書環境は都市部よりも地方、なかでも町村部のほうが厳しい状況にある。例えば、公立図書館の設置率は、2018 年度で、市（東京 23 区を含む）が 98.9%に対して、町村では 57.0%にとどまっている [1]。書店が 1 店もない地方公共団体（以下、自治体）も、2017 年の時点で、北海道が最多の 58、次いで長野県の 41、福島県の 28、沖縄県の 19 など [2]、やはり地方ほど顕著である。

地方の町村には、離島も相当数含まれている。筆者の調べでは、離島のみで構成される自治体は、2019 年 4 月現在で、63 自治体であり、その内訳は市が 8（佐渡市、壱岐市、五島市、対馬市、奄美市、西之表市、宮古島市、石垣市）に対して、町村が 55 となっている。こうした離島の自治体における読書環境を対象とした研究は少なく、離島の図書館を対象に実態調査を行った岡本真ら LRG（ライブラリー・リソース・ガイド）編集部による「離島の情報環境」（2015 年） [3]のほかに事例報告が数報あるのみである。しかも、離島に

における書店や学校図書館も含めたトータルな読書環境を詳らかにした調査は行われていない。

そこで、筆者は、2019 年度に離島のみで構成される自治体に対して読書環境（書店、公立図書館（公民館図書室などを含む）、学校図書館）の実態を詳らかにするべく質問紙調査を行った。また、その結果をふまえて、特徴的な取り組みを行っているいくつかの自治体に対して訪問しての聞き取り調査を行った。

今回の発表では、特徴的な取り組みを行っている自治体のうち、公営書店と公立図書施設 [4]（以下、本稿の 3 では図書室とする）の複合施設「BOOK 愛ランドれぶん」を設置・運営する北海道礼文町についての調査結果を報告したい。

2. 方法

北海道礼文町の「BOOK 愛ランドれぶん」に訪問し、担当者への聞き取りを行った。調査は 2020 年 1 月 13 日の午前に実施した。聞き取りの主な内容は、「BOOK 愛ランドれぶん」整備の経緯、運

営の実態，特色，課題などである。

3. 結果

3.1 北海道礼文町の概要

北海道礼文町^[5]は，礼文島にある1島1町の自治体である（北海道宗谷総合振興局管内）。1956年に船泊村と香深村が合併して礼文村となり，1959年に町制を施行して礼文町となった。現在も，旧村の中心地であった船泊と香深に市街地が形成されている。町役場は香深に設置されている。

2020年3月現在の人口は約2,500人である。ピーク時（1950年代）には約1万人の人口を擁したが，以降は減少傾向である。

礼文町の香深フェリーターミナルまでは，稚内フェリーターミナルからフェリーで約2時間の距離である。船泊には礼文空港があり，2003年までは稚内空港発着の定期航空便も就航していたが，利用の低迷などから運航を終え，空港も供用を休止している。

3.2 「BOOK 愛ランドれぶん」開設の経緯

「BOOK 愛ランドれぶん」は，公営書店と図書室の複合施設である。香深に立地し，町役場の隣にある町民センター1階に設けられている。

関連資料を提示していただきながら聞き取った内容をもとに，開設の経緯をまとめる。

開設は，1993年10月30日である。もともと町内には書店が2店あったが，取扱いは雑誌が主体で，新刊書籍を注文しても手元に届くのに3か月近く要する状況であったという。また，小学校や中学校に学校図書館はあるものの町民誰もが利用できる町立図書館もない状況であった。こうした読みたいときに読みたい書籍が手にできない状況を解消するべく検討を進めているときに，町の担当者が目にした新聞記事が「BOOK 愛ランドれぶん」開設の契機になったという。その記事とは，岩手県三陸町（現，大船渡市）による公営書店「ブ

ックワールド椿」開設（1992年）を報じたものであった。この書店は，財団法人出版文化産業振興財団（JPIC）と三陸町の共同事業として始めたものであった。

さっそく礼文町は1992年のうちにJPICにコンタクトを取り，町教育委員会の社会教育主事が東京都内の書店で研修するなど，約1年の準備期間を経ての開設となった。三陸町の「ブックワールド椿」と同様に，「BOOK 愛ランドれぶん」はJPICと礼文町教育委員会の共同事業として開設し，開設にあたっては通商産業省（現，経済産業省）関連の補助金と日本自転車振興会の支援を受けた。

開設当初，「BOOK 愛ランドれぶん」の書店コーナーには約1万冊が並び，うち3割は児童書・絵本，1割を「花の島・礼文」の特徴を生かすべく花や高山植物の書籍という在庫構成であったという。また，図書室コーナーには，町が用意した約5,000冊と全国から寄贈された約2,000冊のあわせて約7,000冊の蔵書が排架されたという。

なお，現在，礼文町内には，「BOOK 愛ランドれぶん」のほかに，船泊に個人経営の書店が1店ある。

3.3 「BOOK 愛ランドれぶん」の運営方法と特色

「BOOK 愛ランドれぶん」は，書店コーナー（写真1）と図書室コーナーから成る。図書室コーナーは，さらに児童スペース（写真2），一般スペース（写真3），コミュニティスペース（写真4）に分かれている。ただし，カウンターは1つ（書店コーナー，図書室コーナー共通）である。

運営は，礼文町教育委員会の社会教育担当が直接行っている。教育委員会の職員が書店コーナーの販売と図書室コーナーの貸出の両方を担っている。普段は，職員2名体制だが，今回の調査時は1名であった。したがって，運営の実態は，複合というよりも一体といったほうが正確である。

書店コーナーの在庫はトーハンから仕入れている。売上利益が運営経費と在庫充実に当てられて

いる。聞き取りした担当者のお話では、新刊の書籍は販売をベースとし、発売から一定期間過ぎたものを町で購入して図書室コーナーの蔵書にしているという。書店コーナーでは、100円ごとに1ポイントが貯まる独自のポイント制度を導入し、一定のポイントがたまると書籍が1冊無料となる。

図書室コーナーでは、児童サービスに力を入れており、児童スペースが充実している。実際、訪問日が休日だったこともあるが、親子連れでにぎわっていた。また、図書室コーナーにはセルフでコーヒーやお茶が飲めるようになっていたり、コミュニティスペースで「礼文町写真研究会」の写真展（訪問時）が開かれていたり、読書だけでなくサードプレイスとしてのくつろぎや町民相互の交流も意識した環境整備やサービス提供がなされている。



写真1：「BOOK 愛ランドれぶん」書店コーナー



写真2：「BOOK 愛ランドれぶん」図書室コーナーの児童スペース



写真3：「BOOK 愛ランドれぶん」図書室コーナーの一般スペース



写真3：「BOOK 愛ランドれぶん」図書室コーナーのコミュニティスペース

3.4 「BOOK 愛ランドれぶん」の課題

「BOOK 愛ランドれぶん」の課題としては、スペースの狭隘化や施設自体の老朽化といったハード面の課題がまず挙げられる。加えて、高齢化の進展に伴う宅配ニーズへの対応といったソフト面での課題もあることが分かった。礼文町内の漁協購買部や多くの個人商店では以前から宅配サービスが行われているという。

4. 考察

「BOOK 愛ランドれぶん」の特徴は、町の教育委員会が書店を経営していること、そして書店と図書施設が一体的に運営されていることである。

公営書店は、これまでもしばしば注目されてき

た。近年では、青森県八戸市に 2016 年にオープンした市営「八戸ブックセンター」が話題になった。その一方で、これまでに開設された町村営の書店（大分県耶馬溪町「わかば書店」、岩手県三陸町「ブックワールド椿」、福島県飯舘村「ほんの森 いたて」、長野県北御牧村「BOOK 童夢みまき」）はいずれも閉店している。また、図書館などの図書施設と書店の一体運営も、近年、TSUTAYA による公立図書館運営（指定管理者）への参画により賛否が起こった。

「BOOK 愛ランドれぶん」は、開設から 27 年を迎える公営書店の最古参であり、書店と図書施設の一体運営の嚆矢ともいえる。離島における読書環境整備の成功事例の 1 つであることは間違いない。現在まで運営上大きな課題なく継続できているのは離島という地域特性が関係しているのか、他の事例との比較なども行いながら、さらに検討を進めていきたい。

注・文献

[1] 日本図書館協会図書館年鑑編集委員会編。

図書館年鑑 2019. 日本図書館協会, 2019, p.300.

[2] 書店ゼロの街, 2 割超 420 市町村・行政区. 朝日新聞 (朝刊) . 20170824, p.1.

[3] LRG 編集部. 離島の情報環境. LRG. 2015, no.10, p.44-139.

[4] 教育委員会の所管ではあるが、図書館法には基づかない施設である。ただし、以下に詳しく述べるように、実態は公立図書館に相当する機能・サービスを町民に対して提供している。

[5] 礼文町の概要については、町のウェブサイト <http://www.town.rebun.hokkaido.jp/> に詳しい。

付記

調査にご協力いただいた「BOOK 愛ランドれぶん」の担当者ここに記して感謝申し上げます。また、本発表は、平成 31 年度専修大学長期在外研究員による研究成果の一部である。